

<開会 13時30分>

意見交換 - 1h05m14s

事務局 榎原 意見交換に移りたいと思います。先ほど私どもが説明した内容等を踏まえて、ご質問、ご意見、アドバイスとかあとは、それぞれみなさんがご承知の事例とかがあると思いますのでそういった事例などもご紹介いただきながら何か参考になるものがいただけたらなと思っております。勝手なんですけれども順番にご指名をさせていただいて、順番にですね、お話をいただけたらなと思っております。
最初に県民局の原田課長さん、何かございますでしょうか？

官 原田 私は前任は産業振興課にいまして確かに今の規模から言うと新しいベンチャー企業とかとかそういった、新しいビジネスプラン。非常に西粟倉村、そういったところが皆さん頑張っておられるなと聞いてると思いましたが、実績的には数字の方あまり存じ上げてなかったんですけどなかなかこれだけ入ってこられるのは本当に大変なことだと思うので、皆さん本当に日頃の頑張りがすごいなと思っています。で、今回入ってくる方も若い世代が多いんでしょう。子供さんが結構増えているのでしょすが、まだまだ合計特殊出生率が低い。今後が期待できるところでしょうけども。例えば奈義町さん、合計特殊出生率が高いんです。一世帯当たりの多子世帯が非常に多いと。3人産む方がいらっしゃるというので。多子世帯に対する何かこれからの政策、そういったものとかは考えられませんかというのを聞いてみたいのと、細かいことなんですけどKPI、A4のやつで全部同じ数値なんですけど28年の数字違ったりするんですけどそれはどうですか。例えばローカルベンチャーの売り上げ規模は一番 28年の実績が9.4億円、次のところが実績 8.5とか

事務局 榎原 そうですねごめんなさい。同じもので、上の方が正しくて同じように下も直さないといけないのをちょっと直していないだけです、すみません失礼しました。

原田 職場と住居が一体になったのがあるんですけど、なかなかインキュベーションで新しいベンチャー10が10残らない中で一旦入ると出るとは言えない。そこら辺ちょっと心配だなと思いつつも、もうちょっとベンチャーの方がしっかりやっていくいろんな工夫がいるのかなと。
経常収支比率で若干下がり気味だったのが上がっちゃったのは何か、特にこれは高止まりするようなことでなければいいが、原因が分かっておられるならかまわないと思うんですけど その辺の要因がもし分かっておられ

れば。

事務局 榎原 ありがとうございます。経常収支率の関係は課長の方から話をさせていただきます。

事務局 栗屋 経常収支率が29年度から上がっているのはですね、主たる要因は人件費と認識しております。前年に比べまして職員の数が3名増えている状態で、単純に一千万ちょっとくらいですかね。人件費が増えている状況になります。これはただですね、職員が少ない中でやってきていますので、リアルタイムに減ったら入れるみたいな人の採用の仕方をしてしていると、事業の継続性も何も失われてしまいますので、一定の数を毎年必ず入れていくという認識で採用を行っております。具体的には年に一人は絶対に入れていくということでやっておりますが、今後ですね、我々も名簿には入っているんですけど、何年には私が辞めてみたいな流れの中でですね、若干年度によっては多くなっている部分はありますし、当然これがとんとんになったり、逆にマイナスになる時もまだ出てくる予定でおりますので、そんな考えの中で言っておりますので、この経常収支率、人件費に基づく増加率というのは致し方ないという認識の中でおります。

原田 職員の年齢構成を勘案しながらということ。これはまあ長い目で見れば。

事務局 栗屋 流されていくものと認識しておりますので、まあやっぱり一時期バブルの頃からその後にかけて私らの採用の世代ですね、いっぺんに8人も入れたとかそんなうちの村の役場の規模でそんなことをやっていた時代もありますので、そのつけが若干いままわってきているのかなという部分もあります。ならしていく作業を今やっているということで、一時的には多くなる時も少なくなる時も当分ちょっと続くかなという風に。

原田 原因が分かっておられれば。少ない人数でこれだけの業務をされている大変だと思う。

事務局 栗屋 そういう意味では、なかなかみんな正直頑張っているな、と思っはいますが。

事務局 榎原 住宅の方にベンチャーの方に入って頑張っているっていうところなんですけど、いろんな事業を持って入られている方っていうのが結構あって、ある人は、地域熱供給の担い手をしながら別に事業を持っていたり、そういうことで複数で事業を持っていて自分の生計が成り立っているような人もいたりして、一つ崩れたからといってっていうことにはならないのかなと思っております。その辺は、なかなか一つでは難しいっていう部分も別でカバーするっていうのがされているのかなっていう風に思っています。あとあの、若い世代の多子世代の何か支援みたいなことなんですけど、正直村の方では、何もやっていなくて、よく第三子になると100万円補助とかそういうのもあったりするんですけど、そういうのはちょっと一切出来ていなくて、そういう状況です。あとあの、嬉しいなと思っているのが、子供が今、幼・小・中足すとですね、非常に増えていて、私が持

っている手持ちのデータでいくと、平成14年度とかは全体で200人くらいいたときもあって、今がですね、平成30年度でいくと155名。幼・小・中で155名なんですね。これをちょっと遡ってみますと、平成14年に合併があって、その後どんどん下がってきた時代があって、一番底が、平成23年度の126名なんですけど、そこから言うと30名近く上がっていて、その辺はですね、ちょうど百年の森林構想とか、いろいろな事業始まって軌道に乗り出したというところもあって、いろんな方が地域に入ってきてくださるという効果が、子供の数というところで現れてくるというのが本当に嬉しいことだなという風に思います。ただですね、一世帯とか二世帯が子供のいる家庭が抜けただけでもですね元的人数が少ないので、割と大きなダメージになって、今年もここ10年でいうと最高かなと思っていたんですけど、ちょっと二世帯ほど抜けられたんで、その実現が叶わなかったというのがちょっとあります。

原田 本当に子育て世代でお若い方の横のつながりなど、直接的な支援というよりも集まりやすい環境があるのかな。

事務局 栗屋 保育料とかは減額制度があったりするんです。二人目は半額になったり、三人目になると十分の一になるとか、減額制度もありますので、保育料そのものが安いというのがあるんですけど比較的。

原田 3歳から幼稚園に入りますけど、皆さん幼稚園にはいられますか？延長保育など夕方までの保育事業があるのかなと。

事務局 榎原 その辺りは、現在は幼稚園に100%入っていただいている、あの、時期によっては、隣の智頭町に森の幼稚園というのがあったりしてそちらに通わせたいという方もいらっしゃるんですけど、今は100%通われている現状です。幼稚園の預かり保育、幼稚園がだいたい13:30までなのでそれ以降の預かりなんですけれども、うちの村も随分前から預かり保育の方行っていて、午後7時くらいまでは、対応させていただいているので、一般の保育園とかそういったところと変わりなく就業支援をさせていただいているかと思います。

事務局 榎原 次、鳥取大学多田先生、何かございますでしょうか。

学 多田 毎年、どんどん進化されているというかすごく広がりを感じまして全国にも地域づくりを配信できる事例のひとつだと思っています。今日話を聞いて、いろいろ気づきというかあったのですが、ちょっとまずは質問の方させていただきたいんですけど、今の人材育成、ローカルベンチャースクール非常に大きな部分だと思うが減少傾向との事、その辺りの状況を教えてほしい。

それから交付金終了後の財源としての仮想通貨の話されていましたがその辺りの構想について教えていただきたい。

DMO観光によるまちづくりについては、注目されていることのひとつなんですけど、あわくらグリーンリゾートですかこれを展開する話もある。この辺りですかね。これまでこういうベンチャーそれから観光という、も

ともとあわくらんどあったが、観光の位置づけといいますかその辺りも教えていただきたい。

事務局 萩原

はい。ローカルベンチャースクールのエントリーの減少という課題があるというお話をさせていただいたんですが、実際の、エントリー者数でいうと、まだ二年目でありますので、本当にそれが減少で減っているのかっていうのがあるんですけども、一応、二桁を毎年見込みとして目標にしています。最終的な通過人数は別にしてですね、二桁くらいの応募がある状態を作りたい、これはどこにも書いていないんですけどエーゼロさんと話しながら、欲しいってことで確保するような取り組みをやっております。その中で昨年についてはそこがなかなか出来なかったのと、これは感覚的になるんですけどいろんなところで同じような取り組みが始まっている部分もありまして、確かに人材はいるのですが、いろんなところに散っちゃっているのかなというのを危惧しております。で、その中ですね、西栗倉に呼び込みたいというのはありますので、その辺工夫してですね、一般的な応募ではなくて、先ほど言いましたように、西栗倉のネットワークの中にあるインフルエンサ的な役割を担ってくれそうなどにですね、エーゼロさんがリーチしていってくれたりですね、個別に深くリーチ出来るようなことを今年試しにやっております。もう一つ、ローカルライフラボというプログラムを、研修制度を作ったのをですね施策の中で説明させていただくのに、ローカルベンチャースクールは狩猟型です。獲物をですねちゃんと育った獲物を釣り上げてくるっていう感覚ではあるんですけども、ローカルベンチャースクールを運営していく中でですねやっぱり事業計画をちゃんとかけて、ローカルベンチャースクールにエントリーできる場所のレベルの人っていうのは、やはり全体の地方に興味があるっていう人たちの全体的な数から言うとやはりごく一部だっていることを感じていまして、ローカルベンチャースクールに応募はしてくれてくれるんですけど、もうちょっと、もう一押しっていう人たちを、やっぱり落とさざるおえないようなところに直面しているところがありまして、その前に、やっぱり一旦地域の中に入らせていただいて、西栗倉村っていう地域の中でどういふことが出来るかっていうのをしっかりみてもらうということも、必要なことかなという観点からローカルライフラボというのを始めています。先ほど言いましたように、ローカルベンチャースクールのエントリー者の予備軍といいますか、こういう人材が来てくれるといいなっていう願いもひとつにありまして、そういう取り組みをしながら優秀な人材とか、また地域で企業したり、右腕左腕になってもらえるような地域を賑やかにしてくれるような人たちが来てくれるといいなっていう取り組みをやりたいと思って、そういう風に減っていったっていうのはちょっと感覚的な部分はあるのですが、その感覚を元に、対策としてはそういうことをやりかけているところでございます。

それと2点目のICO、これは実を言うと一旦昨年のこの6月に実施する方向で行きますと発表したと思うのですが、状況で言いますと一旦春以降ですね、国の規制の関係の方でちょっと正直やきもきしているところもあったんですけどなかなか定まらなくてですね、昨年コインチェック事件がですね、ちょっとなかなか仮想通貨というのが暗いとか、イメージが悪いところがあるんですが、今回ICOについては真面目に、質のいいICOをやり

たいていというのが念頭にあります。衆議員の平井先生ですかね、が、ICOをやりたいというのが念頭やるっていうのが似てるんじゃないかっていうのを発表してくれたり、お話ししてくれたりしていただいた関係で、ちょっと追い風が吹けばいいなと思ってるんですが、国の動きを今見ているところ、質のいいICOをやっぴりやりたいと思ってるので、一旦発表した案があるにはあるんですけどそこからもうひとつ、国の方針が決まるまで少し時間がかかりそうに踏んでいるので、その期間を利用して更にいいICO。今のなんとも言えない良くないようなイメージに行きがちなんですけれども、そこではない、大丈夫っていうのをどういう風に来るかっていうところをエーゼロさんとそれから複数の民間事業者さんとやっていきたいなという風に思っています。でこれは今後、実現に向けていきたいと思っております。で、ふるさと納税とかですね、クラウドファンディングとか、いろいろ自治体が、資金を活用する方法というのは増えてきているんですけども、その中でもひとつ、その並びにですねひとつ、強力な資金調達の手法という位置づけで自治体ICOっていうのが出来る可能性はあるのではないかと考えてやっていますところ。民間事業者さんと組んでいるのでなかなか細かいお話がしづらいところもあるんですけども、ちょっと夢見て進めていきたいと思えます。

最後、DMOについてなんですが、現状ですね、ちょっと今村内で言いますと年間5億ちょっと稼いでいる、あわくらグリーンリゾートさんのところに、DMOっていう機能がないんです。一部、一部と言いますかエーゼロさんが、言っちゃうとDMO的な役割を果たしてくれているところがあるにはあるんですけども、一旦は、AGRがDMOになるっていうよりは今ちょっと点で動いているものを、ちゃんとハブをこしらえてですねしっかり面的に今の流れを見せていたり、もしくはそれぞれが点で今動いている地域経済ですね、面的に流動化させることで、全体のパイをあげることでできないのかなっていうことを念頭に、AGRがするっていうことありきにはちょっと考えていないんですけども、どんな処方がいいかなっていうのを今検討しているんですが、その辺はAGRに入っている日本人材機構さんといろいろ話をしつつ、どういう形がこの西栗倉にマッチするのかなっていうのを検討しているところです。で出来ればこのローカルベンチャーとして地域外から広い視野を持ったりとかそういうことに長けたり、ネットワークに強い人材を、引き入れてですねそういう仕組みが、この地域に作り込めればいいなと考えて今ちょっとこうやりかけているところあります。

多田

今 南信州観光公社というところにかかわっている。飯田市観光によるまちづくり2002年くらいかなDMO的なことをやっている。10年以上たつてかなり仕組みが整ってきまして、地域農家に関わるシェアリングエコノミー、農家民宿を組織して、地域資源、川の流れ、自然景観などを全てを商品化して、修学旅行など来てもらっている。着地型観光というが、本来の人を呼びこむ取組ではなく、地域の中の供給の仕組みがシステム化されている。その結果として人が来ている状況。観光というと人を呼び込むということが多いが、地域の価値を創造する仕組みが重要。観光客が来るのは結果であって、重要なのは仕組みづくりというのでいいと思っている。多様なローカルベンチャー、その集積、それをつなげてい

く仕組みいいなと思っている。

これからの新しい局面として ぜひ進めてほしいと思っているが、その他の資金ということでICO、多様な調達の一つということで良いか

事務局 萩原

今西粟倉で中でやっている事業も、プロジェクトごとにファイナンスを切り替えてやっています、小水力発電所を作るときはSPCを作って民間融資を受けるとかっていうのをやっています、その中で仮想通貨、トークンエコノミーで形成できるっていうところから考えて、西粟倉ローカルベンチャーっていう資源といいますか、人を増やしていくことを進めていくには親和性の高い資金調達の手法ではないかなという風に考えて今取り組んでいるところです。

多田

仮想通貨、単にお金の話ではなく、人をつなぐという側面がありますね。お金を通じたプラットフォーム的な。資金調達だけでなく、方向としてはいいと思う。最後にLVSへの応募じゅーくのような地元の人ってどうですか。

事務局 萩原

そうですね、あの一応エーゼロさんと地元の方が企業というのがもう少し起きてくればいいなという風な話はしております。今このお配りしています、ローカルベンチャー図鑑っていう方に30事業者をあげているんですけども、この春にやっとなつくりましてですね、決定的なところは27事業者さん、それからそのうしろの、どんな事業やっている人が地域にいるのかってゆうのが28事業者載っています。載せてもらいたくないっていうのも若干いまして、あのそういうのは、そうすかかってことで載せていない部分もあります。だいたい30ぐらい。今年度初めですかね。29年度末時点でそのくらいおられます。で、ローカルベンチャーが10づつくらい増えて、10くらいエントリーしてもらって、その中で、ローカルベンチャー図鑑のその中でも3社くらいかな？今年、今年度？林業事業体として百森を進めるために、新たに林業事業体で起業された方っていうのが村内におられる方だったりっていうのはあります。ただあのIターンは増えているのですが、Uターンはほぼほぼないっていう西粟倉の地域性もあったりして、地元の人が起業してくれるといいなあという話は出つつですね、あの、ローカルモーカル研究会っていう場とかは作ってはいるんですけど、そのあたりのマインドの伝播みたいなものはまだちょっと起こりきっていないなあっていうのが正直なところでもあります。Iターンの奥さんが起業するっていうパターンも結構あるんですけど。

多田

じゅーくの大橋さん、話を聞いたとき、Iターンの人がある、自分も村が好き、その輪に入りたいと言っていた。外から来た人が刺激を与えてくれるそれが広がればいい。地元が入ると定期的にLVSで人材育成できる。

事務局 萩原

あのちょっとね、旬の里でやられているメゾンドフルージュっていう苺のお店なんですけど、焼き菓子を、お菓子を作るアトリエが旬の里に作られて、そこにパティシエとして西粟倉村出身の人がUターンで帰ってきたりとかっていうこともありまして、これから先いろんな事業が立ち上がって

いくことで、都会でしか仕事が出来ていなかったのが、帰ってもやりたい仕事出来るようになっていけば、そういう多様な地域になっていけばなと思って進めているところです。

多田 そういう広がりあればいいですね。

金 田口 7月からの林野支店の支店長 その前は本部で創業支援の担当をしていた今回出て、西栗倉村にも、希望でもあったんですけど 非常に嬉しいなあと思っています。

ご質問なんですけども、岡山のビジネスプランコンテストで接触を持った人もいて、こちらから融資どうですかという話をしたこともある。

やっぱり、交付金が手元にあることもあり、金融機関の立場で言うと出番がない状況。32年度に交付金が終了した後ということを考えると、資金調達が手厚いとそのあと、筋肉質な体制の企業をつくらないとその後どうなのかという懸念もある。

関連して住宅もやっておられるが、私の前任がそういう話の中で作ったアパートが入居者等で苦戦している状況がある。その辺りも知っておいてほしい。結局その融資は某銀行が断ったので私のところが受けたのだが、逆にあの時断ってくれればと言われた経緯もあって、なかなか苦しかった。理由はいろいろとあると思うが融資しているとあまり手厚くすると苦しいなど。我々にその場を与えてほしい。

事務局 榎原 ありがとうございます。あの創業支援者数とローカルベンチャースクールの参加の人数の対比なんですけれども、ローカルベンチャースクールとかですね、ローカルモーカルとか言った場合については実際に審査を受ける対象の方だけではなくて、一般の聴講者とかそれを見守る人たちっていうのもいたりして、その人たちの数も参加人数も数えていたわけですからそういった数も含まれているということで了承いただきたいと思えます。

ちょっと牧さんに聞きたいんですけど、いいですか。さっきトマト銀行さんから起業家の方とかに交付金とかが手厚いと、続けていくっていうことが、将来的になくなったときに難しいこともあるんじゃないかっていう話があったんですけど、その辺牧さん起業家を指導していく立場としてどういった感覚をお持ちですか。

産 牧 本当におっしゃる通りで、そういうリスクは多分にあるとは思っています。ですので本当に本当に、ここはチャレンジしていきたいとか、新事業の開発に関する業務委託っていう研究が一番大きなお金がローカルベンチャーに入るといふのがありますけど、挑戦的に開発的な要素が大きいものでそれ自体に固定費が上がるような使い方に、なりにくいように注意していかないといけないと思います。一時的なお金で固定費が膨れ上がると苦しくなりますので、そういった投資に回らないけど売り上げが伸びているようなそういった状況になることを意識しているところです。

事務局 榎原 次に、津山公共職業安定所美作出張所の村上さんお願いします。

労 村上 私がハローワークですので、仕事の状況でいえば出張所、私が所属している勝英地区ですね、こちらの管轄。ひとりがどれくらいのお仕事があるかの倍率が1.51という状況であります。全国が1.62、それから岡山県全体で1.95という状況ですので、全国的に見れば、もしくは他の県内で見ればこの地域、西粟倉村も含めてまだ人手不足がやや緩やかな部分はあるのですが、ただこの一年間を見ますと全国よりも、県よりも、跳ね上がりというか倍率の上昇幅が、全国より大きくなってますから起業からの声を聞いてもそういう状況で今日はベンチャーの一覧を改めて見させていただきまして、複数の企業、役場からも求人をしていただけてなかなかあがってない状況ではありますが、ただ一部、いただいている企業さんを見ますと西粟倉村の方もいますけど、美作市からも採用また一部圏外、からのハローワークの採用でおそらく移住されて、こちらにお住まいになっているのかなと思いますけど、そういった方の実績も見てますので、人手不足が加速している部分もありますけど、そういう取り組みを新たにいただいている企業さんもあります。それにはミュウ様からも求人をしていただけていたりするんですが、地元の方それから、求人をいただければ、圏外からもそういったハローワークからのご紹介もあります。そういった部分からご協力はしていただけるかと思います。以上です。

事務局 榎原 やっぱり今なかなか、企業からの要望と、マッチングしない部分っていうのが結構ある。

労 村上 そうですね。そこは、あります。今働き方改革を中心に起業の方にも譲っていただくとかどんどん労働者に合やす働きやすい環境作りをしないと、もちろんご紹介も、応募者すらでない。もちろん採用しても、やはり今、辞められますから定着せずに辞めてしまうということになるので、うちとしては、ご紹介させていただいて、まあ今本当はお一人が二つ三つ、希望があればしていいところを選んでくださいということ 企業からすれば面接すらできない、反応が全くない、そこは本当はどうかと思うんですけど、複数のケースをご紹介して、選んでいただく、そういった場面が多いので 労働条件であったり、環境であったり、そういった部分も合わせるというか、柔軟に良くしていかないと採用、定着難しい状況です。

事務局 榎原 ありがとうございます。では津山朝日新聞の福田様お願いします。

言 福田 私も何回か会に出席させていただいて、特にそのエーゼロさん 取り組みというのが本当にその斬新で事業がわくわくするようなものがたくさんあったので、本当にその、勉強になるなと思うことがたくさんあるんですけども、その資料の中にもある財政の部分で戦略的な投資という言葉がすごく使われているところがすごく気になるところで、本当にその攻めの事業をたくさんされている中で、本当にその人口で言うと2,000人いない自治体が、これだけのことをするのはどういう勇気というか、本当のその、関心させられるんですけど、それを、しっかり先進的な事業をされると同時に、トマト銀行さんが言われたように、財政面でもしっかりその、失敗が許されないところもあるはあると思うので、戦略的投資と言えども慎重に、もう慎重にいかれているとは思いますが、された方がいいん

じゃないかなということと、私もせっかくこのような会に参加させていただいているので、予算を、今後勉強のために見るような機会をもとうかなと個人的には思いました。あと本当に、SDG'sとかICOとかこういった最先端なことを事業に取り入れるというのは、普通の人でも難しいお思いますし、まず理解を村民の方とか事業所の方に理解していただくのは何か特殊な方法をしているのかなという。それとももう信頼されているから、どうやってとられているのかなって勉強のために教えていただきたいんですけど。

事務局 栗屋

財政的な部分で言いますと、それこそバブルの時代から直後しばらくまでの間というのは、いわゆる公債費の残高が年々伸びていって、年間の償還額も、4億とかゆうような償還が発生してっていう時期があったのが事実です。当時大きなものはインフラの整備をやってた時代。つまり下水道の整備です。簡水道の整備を100%やってきたりとか、観光施設の新たな建築を次々やってその借り入れがかさんでいくという状況でありました。ただ、平成15年くらいですね。どこの自治体も大変苦しい状態が起きたときに、行財政改革をやる、まあ国自体もやれということですね、大きな動いた時期がありました。その時期からいわゆる行財政改革をしていないんですけど、大きな事業を控えたりとか、借り入れを押さえたりとか、あるいは借り入れているものの中で利率が高いものを返して、これは国の方針もそうで、そのまま乗っかっていった部分もあるんですけど、そんな中で今随分改善してきた部分であります。起債残高の20億程度まで押さえ込んできておりますし、そのバブルの時期ぐらいにはですね、4億とか5億とかあるかないかみたいな状態だったのが今一応総額出言いますと16億くらい基金を持つというような状態になんとか持ってきております。隣にあの保育園が出来まして、今後道向かいに生涯学習施設と庁舎を計画しております。これだけ投資をしている中で更にそれがやれるのかという意見は議会等でも出てきているのですが、やれるかやれないかと言えば、やりきるしかないんですよ。それに向けたちゃんとバックボーンが、財政的なバックボーンがある程度準備できたので、やっているっていう部分はもっております。40億の残高を20億、つまり半分にしたわけですね。それから基金が4億ほどしかなかったものを16億まで持っていったっていうことだけでも、それなりに年々の努力をしてきた結果がそうになっているところは、自覚というか自信を持って言える部分かなとは思いますが、逆に言うとはですね、何かうまい手があってそれができたのかということもありません。本当にもう積み上げていくしかない状況ではありませんでしたので、財政についてはもう本当に私どものような小さな規模の財政はもう、どこもそうだと思います。何か思いついても、今年中はどうにかかって来年から切り替わるというのはまずありませんので、そういった積み重ねの中で、十何年経ってようやく次のところに、大きく踏み出せる状況になっているんです。という風に考えております。住民のコンセンサスの部分は、どうなのでしょうね。説明はですね、以前よりも、時代が今変わっていますんで、行政がやっているんだから文句を言うな！みたいな、これはバブルの時代の話ですよ。お金もあるんだから文句言うなみたいな時代な話だと思います。今そんな時代では当然ありませんし、出来るだけ丁寧な説明を心がけてはきておりますし、議会等でもそういうことを意識して、ご質問いただいたりという場面も多くなってきてはおりますが、住

民の方もですね、例えばそのローカルベンチャーみたいなもので外からの人がどんどん入ってきたときには、やはり一時的にアレルギーのような症状がございましたし、今のそれがゼロになったとは思いませんが、時間をかけることで受け入れてもらえることもあるなと思いますし、それと、現にローカルベンチャー等で目に見えて、実績をあげている人が出てきているところがそこを後押ししているじゃないかなあとと思います。行政が本当にいくら説明をしてもですね、ただ言ったことを受け止めてくれるようなことには絶対にならない。ですけど、そういうことに取り組む方々が実績をあげてくださることで、住民の方も、前向きにそれをいい方に、理解してくださるといことが徐々に出来ているんじゃないかなと、これは感覚の話でしかないんですけども、そういう風には思っております。すみません、答えになっていないですけど。そんな感じで思っております。

事務局 榎原

ちょっと福田さんにお聞きできたらなと思っていたのが、我々今地方創生とかそういう取り組みをやっているんですけど、あの、県外もそういう取り組みいろいろやっていると思うんですけど、やっていることはいろいろあるとして、そういうのが市民の方々にどう映っているのかなっていう、ちょっとその辺、いろいろな方と機会もあると思うので、どんな風に映っているのかをお聞きできたらと思うんですけど。

言 福田

あまり把握できていなくて、皮膚感覚みたいな感じになってしまうんですけど、根拠がないんで、ちょっと申し上げにくいところがあるんですけど、ただそのこういった総合戦略の会議に出たときの内容等々、西栗倉村さんに関してはすごく何歩も先に行っている戦略だなと思って、今どっちかという、半歩先行くみたいな計画が多いんですけど、本当に、2歩も3歩も先に行く計画をされているので、そのギャップをどう埋められているのかなっていうのは、逆にうらやましくもあるんです。そういう取り組みが戦略的にできるのはすごく信頼されている自治体さんなんだろうなと思うこと。まあ人数が多かったら、やっぱりその勇気を出して踏み出すことも出来ないだろうし、住民の方がどう思われているかっていうと今自分の今日の前の生活を守られている方がたくさんいるのであんまりその、ちょっと2歩3歩いった事業っていうのは打ちにくいんじゃないかな、打ってほしくない人もたくさんいるんじゃないかなというのが、個人的な、何かに基づいて言っているわけではなくて、苦勞されているんじゃないかなと思います。計画を練られている方は。

事務局 榎原

なかなかね、そのギャップを埋めるところまではいかないんですけど、特に小さな村だからこそ行政が引っ張って行かないといけない部分もあるので、そこについてきていただいている村民の方っていうのが有り難いなっていう風に思っているんですけどね。議会も含めて、行政を信頼してくださっている結果かなという風に思っています。ありがとうございます。

事務局 榎原

牧さんお待たせしました。全体を通してのご意見をお願いします。

産 牧

資料に目を通して見て、自社が関わっている事業もあるのでしっかり成果

を出さないといけないと改めて思っている。また改めて色々な会社が育っているなど感じている。今わたしも北海道でSONRAKUさんと一緒にエネルギーの事業も行っている。主要なある程度売り上げがあるベンチャー、SONRAKU、森の学校、エーゼロ、木薫、AGRこの辺りの売り上げを足していくともう十数億ある。かぶらない形でお客を増やしていく過程で横の連携、人材育成の連携が効果的だと思っている。SONRAKUとは意図的に交流を深めてお互いの事業を支えあっていく流れがあるんですけど、ローカルベンチャー同士横のつながりを大事にすることが村の生態系を豊かにしていくことになるかなと考えている。

事務局 榎原

ありがとうございます。岡野さんせっかくなので、今エーゼロの方で、いろいろと地域の資源を掘り起こしたり新しく生み出そうという取り組みをされておりますけど、そのあたりを、どういったことをされているかの共有とかご自身も移住者で、この村で暮らしていただいていますけれども、仕事とか暮らしとかそういったところで感じられていることが何かあれば聞かせて貰いたいな。

産 岡野

そうですね。あの、わたしエーゼロで自然資本事業部という部署の責任者をしておりまして、うなぎの養殖をしています。で、あの今はうなぎだけではなく川を再生して山から端材をとってきてこの地域の資源をでビジネスが回せるっていうのはやっています。7人事業部にメンバーがおりまして、まだまだ7人が食べれるようになるにはいろんなチャレンジがあるなあというのが正直なところです。で、私これまでいろんなところに住んできて、直前アメリカに住んでいたんですけど、来てみてツアーも組めて、非常に楽しんでいまして、保育園ができて非常に僕らも嬉しいんですけどただ保育園ができたのではなく、本当に、いい保育園ができていて、あの、木を使って、子供が本当にいい時間を過ごせるものができていて、この今日の資料を見ても思ったんですけど、去年の事業の中で、西栗倉村のひとつのテーマ、言葉として「生きるを楽しむ」っていうことが挙がっていて、あの、人口の目標、人口の話だとか、住居の数だとか、その数だけだったら、どこの自治体も私が今まで住んできた世界中の自治体でもあるんですけど、その数の先に、「生きるを楽しむ」っていうのがあると、生きるを楽しむ住宅があって、生きるを楽しむ教育があって、それがとても西栗倉村がいいなあと思っています。最後に、やっぱり私も事業部を持って感じるのが、企業も、ただ企業の数を作るんじゃない、まあ生きるを楽しむもそうなんですけど、しっかり利益を出す企業にしないと正直言ってなかなか厳しい部分もあるなあというのが、あの私の正直な感想で、ようびさん、SONRAKUさん、うち含めやっぱり、都会と比べて給料をなかなか事業部のメンバーに出せなくて、で地方に行ったら逆に、Iターンの人だと生活費が上がるくらいのこと多くて、交通費だとか、家賃だとかで、そこでまた選んでもらうためにこう、ちゃんと、成功する事業を、自分たちも作って、周りにもできたらなど。田口さんおっしゃったように筋肉質でやらないと僕らもいけないんだろうなど。地域の環境も、促進されるような環境になったらいいのかなと思います。

事務局 榎原

いろいろご意見いただきありがとうございます。時間があつたらもっとい

：ただきたいんですけど、ちょっと時間の都合もありまして、意見交換の方
：をこれで締めさせていただきますと思います。